

自律・責任	自尊感情	協調性	コミュニケーション	思いやり	主体性	特別な支援の充実	市町教育委員会の取組
-------	------	-----	-----------	------	-----	----------	------------

自律性や責任感を育成するための取組

福山市立西小学校 校長：小島 八重【施設泊】ツネイシしまなみビレッジ

キーワード：児童による目標の設定・自己評価と他者評価

1 児童自らが集団としての課題を出し合い、それらを克服していくため体験活動の概要

(1) 児童の主体性を育てる視点からの目標設定

本校では、宿泊活動の目的を次のように設定しています。

- 一人一人が責任を持って自分の役割を果たし、協力して自分たちの力で集団生活ができる力を付ける。
- 自然の中での体験活動を通して、総合的な学習の時間、教科等や道徳の発展的な学習を進め、心を豊かに育てる。

その学校としての目的を受けて、児童が自律的に取組を進めていくために実行委員会を組織しました。まず実行委員会では、具体的なテーマを他の児童に公募をしました。いくつかの公募の中から、実行委員会が協議をし、最終的に具体的なテーマを決めました。

児童が考えを出し合って決めた3泊4日体験活動のテーマ

「みんなで協力・スクラム組んで・笑顔はじける宿泊学習，山海島」

事前学習のポイント：自分たちの課題分析

自分たちで課題を出し合って、体験活動のテーマや目標を決めています。自分たちで設定しているので、子供たちは、主体的に責任を持って取り組むことができます。

(2) 児童による実行委員会

実行委員会では、テーマ以外にも、活動時の司会、挨拶、お礼の言葉の担当をしたり、中心となってしおりを作成したりしました。

宿泊活動前に、課題を出し合った時には、次のような課題が出てきました。

- あまり家の手伝いをせず、身の回りのことは家族にしてもらうことがある。
- 掃除や給食当番のとき、しゃべったり遊んだりしてしまい、やらなくてはいけないことなのに、友達に任せることがある。
- 1つのことに集中する力が足りなくて、しんどくなるとがまんできず、すぐ楽な方へ流されてしまう。
- 話し合い活動が苦手で、友達の考えと自分の考えがちがったとき、それを受け入れられず、自分の意見を主張しすぎて、言い争いみたいになることがある。
- 「言われる前に行動しなさい。」って、先生から叱られるようなこともある。
- 次の予定が分かっているけど、時間を見て行動できないこともある。

これらの課題を解決し、自分たちを成長させる宿泊学習にするために、事前にいろいろな準備をしていきました。

まず、一人一人がめあてをもととして、スローガンを考えました。また、実行委員会では、実行委員が中心となり、しおりを作ったり、活動の司会進行や、あいさつ、お礼の言葉を担当したりしました。実行委員会形式を取り入れたことによって、自分たちで宿泊活動を作り上げようという気持ちが生まれてきました。

実行委員を務めた児童の感想

わたしは宿泊学習で実行委員を経験したことで、『人前に出て発表する力』がついたと思います。

今までは、授業中の発表も自分から進んですることはあまりありませんでした。でも、実行委員になって、代表としてお礼やお願いのあいさつをする場面が多くありました。自分で文章を考え、それを覚えて発表することは、緊張してうまくできないこともありました。しかし、練習を繰り返し何度も経験する中で、だんだんと自信をもって話せるようになりました。苦手だと決めつけてやらないのではなく、いろいろなことにチャレンジして経験を積むことで自分の力になることが分かりました。

宿泊学習が終わって、授業での発表も増えました。また、選挙管理委員にも立候補しました。これからもチャレンジを続け、六年生になっても苦手なことにも挑戦していきたいです。

事前学習のポイント：役割分担のすきま

実行委員を務めることによって、自分の役割への意識が高まります。他者からの「司会ぶり、とてもよかったよ。」の一言で、一人一人のモチベーションはさらに高まります。

ただ、自分の役割と他者の役割だけでは対応できないことも出てきます。そのような時でも、そのすきまをうめるような動きをする子供たちが必ず出てきます。こういった子供たちの姿を見逃さず、肯定的な言葉がけをすることによって、集団としてさらに高まっていきます。

生徒指導の三機能を踏まえた取組ポイント：自己存在感を与える

自己存在感

共感

自己決定

一人一人は、かけがえのない存在であり、一人一人の存在を大切にする指導が重要です。子供たちの役割を明確にし、任せきることも必要です。また、自己存在感は、他者とのかかわりの中で、見いだされることもあるので、望ましい集団づくりも重要です。

さらにステップアップ!!



体験活動の事前と体験活動当日、事後とを関連づけて活動させることで、学校においても、自覚して自らの役割を超えて活動し始める子供たちが出てきます。教職員だけでなく子供たち同士でも肯定的に認め合うことができると、子供たちのやる気はさらに高まります。

(3) 3泊4日体験活動の主な内容

	午前	午後	夜
1日目	社会見学 (NHK・マツダミュージアム・昆虫館)		入所式
2日目	火起こし体験 飯ごう炊さん	オリエンテーリング レクリエーション	B B Q 星空観察
3日目	座禅体験	備前焼陶芸教室 飯ごう炊さん	キャンプファイヤー 家族からの手紙
4日目	カッター訓練 退所式		

2 実践の内容

(1) 2回の飯ごう炊さんでの児童の変容

今回の宿泊学習では、飯ごう炊さんは、二日目と三日目の2回行いました。1回目は昼ご飯でカレー、2回目は晩ご飯ですき焼きを作りました。繰り返すことで、1回目の反省を生かして改善を図ろうとする姿が見えるなど、児童自らが考えて取り組もうとする姿が見られました。

飯ごう炊さんを通じた児童の感想

- 飯ごう炊さんでは、仕事を分担して行ったのですが、一番大変なのは、火の番でした。35度近くある暑さの中、火のそばにいただけでも大変なのに、なによりけむりが目にしみて、つらかったです。目をはなすと、火が大きくなりすぎたり、消えかかったりしてしまいます。
だから、同じ人がずっとするのではなく、交代しながらしました。一回目にしみるとなかなか治らなくて、また交代すると二回目は、最初から目が痛くて大変でした。でも、みんなすぐ交代してくれたからうれしかったです。片付けも、分担したこと以外にも、終わってない所を手伝ったから早く終わりました。
- 飯ごう炊さんでは、仲間との協力意識が高まったと思います。わたしたちの班は、始める前に仕事の分担をしっかりと話し合いました。一つの仕事にかたよってしまうといけないと思ったからです。その分担も、みんなのやりたいことや得意なことを生かすように考えました。そして、調理から片付けまで、自分の仕事は最後までやりきるようにしました。1回目の時に時間がかかったグループは、2回目の飯ごう炊さんの前に、もう一度話し合っただけで分担を変えました。1回目に比べて2回目は、ふっくらおいしいご飯を炊くことができました。

体験活動当日のポイント：敢えて同様の活動を行う

同様の活動を行うことで、前日の課題を乗り越え、挑戦することができるようになります。また、一人一人が何をどのようにしていくかを理解した上で活動することになるので、1回目に失敗したことや上手くいかなかったことを取り戻すことができます。

体験活動当日のポイント：自己評価

自分たちの成長や変容は、まず自分たちで感じる事が重要です。「しんどくてもやりきった」など、望ましい自己評価について、事前に想定し、子供たちの振り返りにそれらの言葉が出てきたときに、逃さず認めていくことが大切です。

(2) 夜の集い「この人きらり☆」

一日の振り返りをする夜の集いでは、班の振り返りと次の日の目標設定、そして、お互いのよさを見つける「この人きらり☆」の取組をしました。「この人きらり☆」は、お互いのよさを見つけることで、関わり合うことが当たり前に行っていることを確認できます。「〇〇さん、カレー作りのとき最後まで片付けをしていたね。」「〇〇さん、バーベキューの時、コップがなくて困っていたときに、コップを持ってきてくれてうれしかったよ。」など、書き込んでいきます。

また、付箋紙に書き、貼ることによって、視覚的に付箋紙が増えていくことを確かめることができ、肯定的評価を得られるものとなりました。身体は疲れていても精神的に元気づけられるものになりました。



「この人きらり☆」に取り組んだ児童の感想

- 一人一人の活動の振り返りを聞く中で、その人がどんなところを大変だと感じたのか、どんなふうがんばったのかが分かり、自分の見方や考え方が広がりました。
- ふせんに書くことをきっかけに、友達の嫌な面ではなく、よさに目を向けられるようになりました。
- 友達のことを書くだけでなく、友達に自分のことも書いてもらい、自分のがんばりを認められて、すごくうれしくなりました。
- ふせん紙がホワイトボードいっぱいになっていくのを見ていると、元気がわいてきました。

(3) 家族からの手紙

最後の夜の集いでは、サプライズとして、家族から預かっていた手紙を手渡しました。

普段は家族から手紙をもらうことはないのですが、子供たちは驚いたり、喜んだりしていました。また、ほとんどの子供たちが3泊もの長い間、初めて家族と離れたので、早く会いたい気持ちにもなったようです。



家族から手紙をもらった児童の感想

- ぼくは、一日の生活の中で、布団の片付けや掃除、ご飯の準備や片付けなどやらなくてはいけなかったことがたくさんあるなど初めて思いました。今まで気づいてなかったのは、ほとんど家族がしてくれていたからだと分かりました。全部自分一人でするのは大変でした。
- 元気なときでも大変なのに、家族は体調が悪い時でもしてくれている。今まで当たり前だと思っていたけど、感謝しないといけないと思いました。
- わたしは、手紙をもらって、言葉にしていなくても、ふだんからわたしたちのことを応

援してくれているんだなと思いました。家族からの言葉にすごくパワーをもらいました。3泊4日もの長い間、家族と離れていたから、気付くことができたと思います。

体験活動当日のポイント：他者評価

他者から肯定的な評価を受けて、自己有用感を感じることは大切です。併せて一人一人の子供たちが、自分を振り返って自分のがんばりを認めることができるようにしていくことも大切です。

さらにステップアップ!!



「自尊感情」は、自己に対して肯定的な評価を抱いている状態を指す Self-esteem の日本語訳です。一方、「自己有用感」は人の役に立った、人から認められたといったような相手の存在なしには生まれてこない点が「自尊感情」とは異なります。

「自己有用感」に裏付けられた「自尊感情」を育むことが大切です。

引用：生徒指導リーフ『『自尊感情』？それとも、『自己有用感』？』

文部科学省国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（平成27年3月）

3 体験活動終了後の子供たちの変容

(1) 家族からの肯定的な評価

児童による自己評価、また友達同士の相互評価はもちろん大事ですが、保護者の方の子供たちへの声かけも、子供たちにとってはとても大きな評価になります。

体験活動終了後の保護者の感想

- 家では、手伝いをしてくれるようになりました。特に、食べた後の食器の片付けや料理ですね。「ありがとう」もよく言ってくれるようになりました。そして、時間を見て行動できるようにもなって驚きました。
- 宿泊学習では、意見のぶつかり合いがあったそうですが、班で話し合っ解決したと聞き、人の意見を受け入れられるようになったんだなあ、成長を感じましたね。また、失敗しても「一人のせいじゃないよ」という声かけがあったと聞き、相手の気持ちになって考えることができるようになったとうれしく思いました。

(2) 体験活動での成長を、事後の学校生活に生かしていく取組

宿泊学習でたくさんの経験を通して成長したことを、宿泊学習を終えた後でも、その経験を生かそうと取り組んでいます。

体験活動終了後の学校での様子

- ぼくは、委員会や係の仕事を絶対に忘れないように責任を持って取り組んでいます。そして、誰かに言われる前に自分から動くよう意識しています。
- わたしは、学級委員や運動会の係などにチャレンジするようになりました。運動会の組体操でしんどくても最後まで全力でやりきるようにしました。
- わたしは、歌があまり得意ではないけれど、学習発表会に向けての合唱練習等で、あきらめずに努力しています。

学年として、できるようになったことを次のようにまとめています。3泊4日をやりきったことで感じた自分たちの成長をまとめておくことで、日頃の学校での生活においても、6年生に続く学校のミドルリーダーとしての自覚も出てきました。

学年でのまとめ

- 一人ではできないことも、みんなの力を合わせれば実現できる。
- 一人でするより、みんなと一緒になら何倍も楽しい。
- 自分のよさを認め、支えてくれる友達、家族。
- これからは、ぼくたちが支えられるように強くなっていく。



4 特別支援学級の子供たちも安心して活動できる環境づくり

(1) 難聴学級の児童への取組

福山市の難聴学級は、「難聴の子どもたちに聞こえに配慮した細やかな教育を保障したい。」という関係者の熱意と尽力により開設されています。福山市では、西小学校・城北中学校・西幼稚園に開設しています。

難聴学級では、聞こえを補償するための手立てを工夫したり、特別な教育課程（自立活動）として言語訓練（聴能訓練）をしたりしています。また、通常の学級との交流及び共同学習を通して、ともに学び合う態度を育てています。

(2) 長期集団宿泊学習において考慮した取組

難聴学級の児童は、総合的な学習・生活科・理科などでは、交流学級で学級担任とのT・Tによる指導で学んでいるので、周囲の児童との関わりも深いです。

交流学級の児童は、今回の長期集団宿泊活動においても普段からしている関わりをしていましたが、特に野外での活動ということもあり、次のようなことをより意識してきました。

- 普段から意識していることであるが、難聴の児童に対しては、口の動きを見せながらゆっくり話すようにしている。
- 通常の学級の児童と同じように係や仕事分担をした。できないことについては、周囲が声かけや手を貸す等、サポートするようにした。

「この人キラリ☆」に書かれた児童のこぼれ話

- 交流学級の児童から難聴学級の児童へ
男子部屋みんなの脱いだ靴が散らかっていたとき、すぐにそろえてくれてありがとう。
- 難聴学級の児童から交流学級の児童へ
食事の準備のとき、（歩行器を使っているの）自分が食器を運べなくて先生を探していたら、「持っていくよ」と声をかけてくれてありがとう。

事前—体験活動当日—事後のポイント：他者の立場に立って想像すること

友達の立場になって、野外になった状況や突発的に対応しなければならないことまでを考えてあげる等、友達への思いやりの気持ちが持てるように指導をしてことが大切です。子供たちが日頃の学校生活の延長上としてとらえていることが、西小学校の日頃の教育活動の成果です。